

2014年サケ・マス類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量																
	漁獲（生産）			加工 塩蔵	輸入 生冷	輸出 生冷	東 京			缶詰	消費支出		年末 在庫	日露 協定	秋 サケ	北海 道	本 州
	サケ	マス	養ギン				生	冷	塩蔵		生(万円)	塩(万円)					
25	160.9	9.0	12.2	96.9	249.1	32.9	7.2	34.8	11.0	2.6	3,058	1,652	94.8	5.4	154.6	129.4	25.1
26	146.8	4.7	12.8		219.9	37.9	7.6	24.5	9.2		2,576	1,418	104.2	6.6	138.7	112.4	26.3
%	91	52	105	0	88	115	106	70	84	0	84	86	110	123	90	87	105

年	価 格									
	秋 サケ	北海 道	本 州	輸 入	輸 出	東 京			消費支出	
						生	冷	塩蔵	生(円)	塩(円)
25	423	432	375	620	254	1,001	606	747	4,212	2,031
26	477	478	473	856	339	1,218	850	885	4,192	2,103
%	113	111	126	138	133	122	140	118	100	104

漁 獲 量

26年の北洋サケ・マス漁業は、ロシア200海里枠が中型船3,420トン（前年：2,520トン）、小型船3,210トン（前年：2,850トン）で中型船、小型船とも増加した。入漁料は中型・小型とも303円/kgで前年（298円/kg）をやや上回った。また、割当枠はベニ、白とも増加した。またオホーツク建マスは不漁で前年の半分以下であった。

日本200海里枠は前年上限が撤廃されたが、本年は、カラフトマス主体に1,949トン（うちシロサケ500トン）であった。

秋サケ沿岸漁獲量は、北海道3,223万尾（前年：3,863万尾）、本州813万尾（前年：838万尾）、トン数では北海道11.2万トン（前年：12.9万トン）、本州2.63万トン（前年：2.51万トン）であった。北海道低調、本州やや好調であったが、北海道が途中失速、本州では宮城を除き比較的順調な漁獲となった。

北海道での初漁期当初の漁が順調な滑り出しであったが、9月後半以降、漁の失速がみられ、この頃から価格は、一転上昇に転じた。結果的には北海道、本州とも昨年を上回った。こうした単価上昇もあり、漁獲量の減少の中で、本年の漁獲金額は662億円で昨年の653億円も上回った。また本州でも当初から昨年を上回る漁獲がみられ、捕獲尾数が伸び、結果的に前年を引続き上回る水揚げとなった。価格は北海道の後半の上昇基調の中でそれを引き継いだ格好になり、周年堅調相場を維持した。

魚体は、北海道3.49kg（前年：3.35kg）、本州3.24kg（前年：2.99kg）で、北海道、本州とも前年より大きく、5歳魚以上の回帰が多かった。

国内養殖銀ザケは、東日本大震災による被害から立ち直る兆しがみえ12,600トン（前年：12,200トン）と震災前の水準まであと一步のところまで回復しつつある。

輸 出 入

26年のサケ・マス類輸入量は、22万トンで前年（24.9万トン）を下回った。

本年、天然ではベニがほぼ前年並みであったが、養殖物では主力のギン、トラウト、アトランが引続き何れも減少した。また、冷凍フィレーは、サケ類は増加したもののマス類は前年を下回った（何れもチリ産が主体）。その結果、総輸入量は前年を下回った。

天然物の国別輸入量は（全てのサケ・マス類、フィレーを除く）、米国7.5千トン（前年：6千トン）、カナダ3.1千トン（前年：2.4千トン）、ロシア2.6万トン（前年：3.5万トン）でロシアのベニが減少したが、米国、カナダが増加した。また本年は、チリ銀搬入減と価格高騰の中で、この3国からシロザケやギンザケの搬入が目立って多かった。

また、1999年初めて米国をぬいてトップにたったチリを始めノルウェー等各国からの養殖系サケの輸入は、既に天然ものを遥かに凌駕しており、末端消費も養殖系のギン、トラウト、アトラン主体の流れになっている。したがってチリやノルウェーを始めとした世界各国の養殖生産量の多寡が、書かきも大きな影響を与えている。本年の国別輸入量はチリ9.3万トンで引続き前年（11.8万トン）を下回った。ノルウェーは2.5万トンで、前年（2.4万トン）をやや上回った。またニュージーランド（生・冷）、デンマーク（生・冷）、オーストラリア（生）等からの輸入は引続きみられているが、量的にはチリとノルウェーからが圧倒的に多いことに変わりはない。

輸入価格は、856円で養殖系さけの生産減少による搬入減による影響が他の養殖・天然問わずサケ類に影響が及んだ結果、前年（620円）をかなり上回った。

また、震災前ままとまった輸出がみられていたアキサケは、国内生産の減産と原発事故の影響もまだありながらも、本年は3.8万トンと前年（3.3万トン）を上回り、円安効果もあり順調に回復しつつある。

輸出先は、依然中国が多い（27,370トン）がそのシェアは74%（前年64%）まで回復した。続いてベトナム4,710トン（前年：4,685トン）、タイ4,194トン（前年：5,601トン）、インドネシア425トン、台湾379トン（前年：89トン）、フィリピン144トンでベトナムがタイを抜いた。

また輸出価格は、国内アキサケ価格の上昇や国際的なサケ価格の高騰の影響もあって、前年（254円/kg）をかなり上回る339円/kgであった。

在庫量

年末在庫量は、10.4万トンで前年（9.5万トン）を上回った。国内生産量・輸入量の減少と輸出の回復があったものの、サケ・マス類価格の高騰の中で、冷凍原料の取扱の減少と末端小売の取扱が大きく減少したため在庫が嵩んだ結果である。

総供給量

本年は、沖獲りが大幅に増加、養殖ギンもやや増加、建てマスが大幅減少、秋サケも減少、輸入減少・輸出増加の結果、総供給量は前年を下回る43.9万トンとなった。

総供給量	499,169	438,812	88
沖獲漁獲量	5,370	8,579	160
秋サケ漁獲量	154,600	138,700	90
建マス漁獲量	4,800	2,200	46
銀ザケ漁獲量	12,200	12,600	103
輸入量	249,100	219,900	88
期首在庫量	105,999	94,733	89
輸出	32,900	37,900	115

消費地入荷量と価格

サケの東京消費地入荷量は、生7.6千トン（前年：7.2千トン）、冷2.5万トン（前年：3.5万トン）、塩0.9万トン（前年：1.1万トン）であった。

本年の入荷の特徴は、北海道・三陸の秋サケ漁が減産となったものの根強い生需要と引き続き増産基調の銀サケもやや増加、また輸入物の生鮮アトランの増加で生鮮の入荷はやや増加した。しかし、冷凍原料も主力のチリ銀の国内搬入が減少となった結果前年をかなり下回り、なお製品の塩蔵物も前年を下回って推移した。

価格は、生1,218円（前年：1,011円）、冷850円（前年：606円）、塩885円（前年：747円）で原料の高値が反映し、生鮮・冷凍・塩蔵ともかなり上げた。主な要因としては、ギン、トラウトを始めとした養殖系の減産による搬入減、グローバルマーケット化して需要増大が顕著になっていることで、世界的に価格上昇が続いた。この結果が国内サケ市況にも大きな影響を及ぼし、特にウクライナ問題によるロシアのチリ銀買付問題等にも翻弄され、国内サケ市況の高騰を招来した1年であった。